

# 「長征物語」の形成と背景 —長征史研究の現在とその問題—

## The Formation and Background of the “Long March Stories” —Current Problems Related to the Long March Historical Research—

鏡屋 一  
Hajime ABUMIYA

### Abstract

The history of modern China's Long March (1934 to 1936) was compiled from the typical stories, such as “Chi River Crossings”, “Dadu River Crossings”, “Luding Bridge Battle”, “Climb the Great Snow Mountain”, “Across the Great Grassland”, etc.. The first record of the Long March was recorded in memoirs written by the Red Army officers and the soldiers who had participated in the Long March. In 1937, the memoirs of 100 people were compiled but the document was not published. It was published finally in 1942 as part of the Rectification Campaign in Yan'an.

Among the stories that were written based on memoirs in 1937 are Edgar Snow's *Red Star over Over China* and Yougu's “25 Thousand Li Westward Expedition of Red Army”. These provided the framework for sublimating the personal memoir into an objective story.

The 1942 edition of the Long March memoirs was republished in 1954 and 1955, first as a serialization of the magazine, then as a book. Both versions were published at the beginning of the Socialist Construction Movement after the establishment of the People's Republic of China. It could be said that the method of looking back at the history of Long March as it was actually experienced was influenced by political ideology during the period of intra-party fighting.

*Keywords* : China, Chinese Communist Party, Long March, Red Army

キーワード：中国、中国共産党、長征、紅軍

## はじめに

「長征」と称される、1934年から1936年までの中国共産党および中国工農紅軍（以下「中共」「紅軍」と記す）の大移動は、今日においても党と軍の重要な歴史的経験として言及されつつげている<sup>(1)</sup>。

その歴史の振り返り方には一定の特徴があると観察される。英雄たちが活躍するいくつかの定型的な「物語」が接続、融合されてひとつの「歴史」として組み立てられている。すなわち、「過去の出来事は『描写』されるのではなく、「想起的に『構成』され」ているのである<sup>(2)</sup>。

紅軍長征に関わる主要な「物語」は【表1】のとおりである。

【表1】長征物語の類型

物語の名称	物語の内容
(a)「于都惜別情」	紅軍は当時中共政府の首都である江西省瑞金に近い「于都」に集結し長征を開始した。（「于都惜別情（于都の民衆との別れの情景）」）。
(b)「血染湘江水」	紅軍は出発地によって大きく5つの経路で移動した。江西省から出発した紅一方面軍は、湖南省から出発した紅二方面軍との合流を目指し湖南省の湘江を越えようとしたが、国民党軍の陸空からの猛攻撃を受け、出発時の8万6千人の兵力が3万人まで減少するという消耗の甚だしいこの戦役を描く（「血染湘江水（湘江の水が血で染まる）」）。
(c)「突破烏江」	貴州省北部の烏江での勇士たちの強行渡河と迅速な迂回路を通じたの挟撃の成功の物語（「突破烏江（烏江を突破する）」）。
(d)「智取遵義」	遵義（じゅんぎ）城に迫った紅軍の一部が国民党の敗残兵を装い、貴州軍が守る城門を開けさせ、遵義占領に成功した（「智取遵義（遵義を智取する）」）。
(e)「遵義会議」	毛沢東の指導権は長征の途上に形成されてゆく。その最大の転換点が、貴州省内の中規模都市である遵義で開催した「遵義会議」でなされた。
(f)「四渡赤水」	遵義から北上した紅軍は国民党軍の挟撃に遭うが、貴州省北部、四川省南部、雲南省北部で、毛沢東得意の運動戦を行い、赤水を4回渡河し、遵義を再占領するなど、敵の意表を突く兵略を用い敵の嚴重な包囲を脱した。この戦役が「四渡赤水出奇兵（四たび赤水を渡り奇兵を出だす）」（または「四渡赤水」）である。
(g)「巧渡金沙江」	夜陰に紛れた少数の突撃隊が巧みな計略で雲南省北部の金沙江を渡り対岸の敵を打破した話が「巧渡金沙江（巧みに金沙江を渡る）」である。
(h)「彝海結盟」	僱僱（ろろ）族つまり漢人に敵対的な彝（い）族の居住地区を通過するさい、紅軍の將校と彝族の首長が血盟を結んで団結を果たす（「彝海結盟（彝族と盟約を結ぶ）」）。
(i)「強渡大渡河」	四川省西部の大渡河を強行渡河する紅軍兵士の話。18人の勇士が突撃隊を組織し、一艘の小舟で敵の集中砲火をかいくり渡河に成功し敵を壊滅する（「強渡大渡河（強いて大渡河を渡る）」）。
(j)「飛奪瀘定橋」	昼夜連続の強行軍で敵を出し抜いて瀘定橋（ろていきょう）の橋頭堡を確保したうえ、十数本の鉄索のみとなった瀘定橋を22名の勇士が犠牲を払いながら奪取する（「飛奪瀘定橋（強行軍で瀘定橋を奪取する）」）。
(k)「越雪山」	夾金山など3千メートル級の山が連なる四川省西部の大雪山を越える（「越雪山（雪山を超える）」、または「爬雪山（雪山に登る）」等）。
(l)「過草地」	飢えと寒さと疲労で犠牲者を出しながら四川省西部高原の沼沢地帯を越える（「過草地（草原を渡る）」）。

(m)「突破天陰臘子口」	甘肅省岷県の天然の要害、臘子口(ろうしこう)を機動力で陥落させる(「突破天陰臘子口(天陰の臘子口を突破する)」)。
(n)「三大主力会師」	先に陝西省北部の根拠地へ到達した紅一方面軍は、甘肅省会寧で北上して来た紅四方面軍と、甘肅省静寧で同じく北上して来た紅二方面軍と合流し、2年間に及ぶ長征が終了する(「三大主力会師」)。

たとえば、小学生に中共党史を教える最新の教材では、長征時期に関し、「于都惜別情」(a)、「血染湘江水」(b)、「遵義会議」(e)、「四渡赤水出奇兵」(f)、「巧渡金沙江」(g)、「強渡大渡河」(h)、「過草地」(l)とそれぞれ「物語」を配置している<sup>(3)</sup>。

また、大部な長征史である、曲愛国・張従田『長征記』では、「決戦湘江」(b)、「突破烏江」(c)、「智取遵義」(d)、「四渡赤水」(f)、「渡過金沙江」(g)、「勇奪瀘定橋」(i)、「翻越夾金山過草地」(j)(k)とし<sup>(4)</sup>、そして長征の「正史」と見てよい党史研究室の『紅軍長征史』の紅一方面軍に関する項目を拾ってみると、「血染湘江」(b)、「進軍遵義」(d)、「遵義会議」(e)、「四渡赤水」(f)、「巧渡金沙江」(g)、「強渡大渡河」(h)、「翻越夾金山」(K)、「突破天陰臘子口」(m)と分節化されている<sup>(5)</sup>。

このような長征の「ヒストリー(歴史)」を構成する「ストーリー(物語)」はいつ生れ、どのように形成されたのか。その生成と形成の過程について、近年の研究成果に依拠しながら考察するのが本稿の目的である。

## 1. 紅軍長征記の成立過程

### (1) 1937年版『二万五千里』の成立

紅一方面軍が1935年10月に陝西省北部(以下、陝北と記す)の根拠地に到達して9ヵ月近く経過したころ、中共の態勢はようやく安定し、国内情勢も好転しつつあった。広西省・広東省で反蔣介石運動が起り、西安の東北軍張学良に対する中共側の統一戦線工作も順調であった。紅軍総政治部は長征の記録を作成するため、将兵の手元にある文書や日記を集めようとしたが、綏遠での抗日戦、山西での閻錫山軍との戦闘などで余裕がなくなり、計画を変更して、1936年8月、大規模な集団創作とすることとした<sup>(6)</sup>。

計画変更の契機は、1936年7月初、アメリカ人ジャーナリストのエドガー・スノーが上海の中共地下組織と宋慶齡の仲介によって陝北を取材に訪れたことである。中共にとって紅軍と長征を外国に宣伝し外部の援助を得る絶好の機会となった。かくして長征の資料を集める作業が急務となった<sup>(7)</sup>。

1936年8月5日、中央軍事委員会主席毛沢東と総政治部主任楊尚昆が連名で長征に参加した同志に原稿の募集を行なった。その電報による「徵稿啓示(原稿募集の告示)」は次のとおりである。

「現在は絶好の機会である。全国および外国で紅軍の宣伝を行い、抗日の経費を募るには、長征に関する記録を出さねばならない。そのために特に集団による作品を制作するよう呼びかけ

る。各首長および動員され組織された師団幹部は、自己の長征中に経験した戦闘、民情風俗、奇聞逸事について多くの断片を綴り、9月5日以前に総政治部に提出してほしい。重要事項であり、おろそかにしないように<sup>(8)</sup>」。

こうして党中央や軍事委員会の指導者、董必武、李富春、張雲逸、徐特立らは率先して執筆に取り組んだ。政治工作を担う陸定一、蕭華、王首道、熊伯濤らも自ら作文を綴った。保安の紅軍大学第一科で学んでいる36人も学生とはいえ紅軍の高級幹部であり、その多くが呼びかけに応じた。張愛萍、彭雪楓、劉亜楼、楊成武、譚政、耿飜、周士第、陳士榘、莫文驊、彭加倫、舒同、賈拓夫、董小鵬らがそれである<sup>(9)</sup>。

1936年11月22日、陝北の中共支配区に文芸団体「中国文芸協会」が成立した。紅軍総政治部はこの文芸協会に白羽の矢を立て編集委員会を結成した。文芸協会は『長征記』の原稿募集と編集を率先して担うことになり、文芸協会主任の丁玲、研究部長の成仿吾、総務部長の徐夢秋が参加した<sup>(10)</sup>。

著名な女性作家で共産党員の丁玲は1936年秋に西安から陝北に入り、1937年2月に延安に到着、延安師範で中国文学史を教えるなど、文化宣伝工作に従事していた。丁玲の延安での作品には「記左権同志話山城堡之戦」、「彭徳懐速写」、「警衛団生活的一部」、「秋収的一天」、「南下軍中之一員日記」がある<sup>(11)</sup>。

成仿吾も有名な文学者で長征に参加した共産党員である。当時中央宣伝部や中央党校、陝北公学などで文化教育工作を担当していた。

徐夢秋は、中国共産党初期からの党員でソ連留学を経て1930年に江西ソビエト地区に入り、紅一方面軍の政治部主任と紅軍総政治部宣伝部長を務めた。徐夢秋は長征中の大雪山越えのさい、両足が凍傷となり延安到着後切断していた<sup>(12)</sup>。

応募が殺到し、10月には原稿200篇以上が集まった。執筆者の3分の1は文化工作に従事する者、3分の2はそもそも執筆とは無縁の兵士であった。すなわち原稿のほとんどは覚えてたての文字で綴った兵士たちの作文である。数百字しかない作文もあり、内容が簡単すぎて、編集で割愛したものもある。内容が重複しているものは表現が豊かで筋道の立ったものを選び、佳作100篇が入選した<sup>(13)</sup>。

丁玲は「文芸在蘇区」で当時の編集の仕事についてその感激を述べている。「新たな奇跡のような事態が私に起こった。それはつまり長征を記録した『二万五千里』である」。「原稿募集の告示があつてからも、あまり自信がなく、心配でたまらなかったが、東西南北、数百里、一千里の遠くから、はるか砂漠の辺境からでも、光沢紙に書いたもの、粗末な紙に書いたもの、さまざまな原稿が、驢馬の背中で、塞北の風景を眺め、ほこりを浴び、無数の谷を越え、皺がより、字もかすれたのが、伸ばされて、編集者の机の上に横たわっているのだ<sup>(14)</sup>」。

1936年12月の西安事変で紅軍は張学良、楊虎城を支援するため関中平野に南下し、総政治部編集委員会の担当者たちも移動した。ひとり障害のある徐夢秋が残って編集を行った。毛沢東・楊尚昆による原稿募集は陝北の瓦窑堡で、丁玲らの編集は保安で行なわれ、徐夢秋の編集

が終了したのは延安においてであった<sup>(15)</sup>。

編集の作業では、入選した作文を行軍の時間と経路に従って並べ、誤字と特に不適当な表現を改めた以外は手を加えなかった。朱徳が題字を書き、回想録100篇、歌曲10篇と付録を収めた。付録として、重要な戦役の英雄の姓名、経過地点と里程一覧表、経過した名山、河川、難関、隘路、封鎖線の表、紅軍第一軍団長征中の経過した民族区域表、行軍と休息の時間統計表を収めた。この統計は命令、報告、各種の日記、新聞を集めて作成した。最後に徐夢秋が「關於編輯的経過（編集経過について）」を書き、1937年2月22日に完成した。上下2冊、全412頁で、上冊に42篇、下冊に58篇と楽譜10枚が収録された。書名は『二万五千里』（後に『紅軍長征記』と改名）と名づけられ、編集部の人員が清書をし24部を書き写した<sup>(16)</sup>。

最初の長征回想録『二万五千里』は以下のとおり時系列順に配置されている。

- ・ 紅軍が江西を離れる際のもの、董必武「出発前」、李富春「暫別了、江西蘇区的兄弟」など4篇。
- ・ 紅軍が緒戦で勝利し相次いで4路の敵を粉碎した際のもの、童小朋「夜行軍的一幕」、莫文驊「在重困中」など22篇。
- ・ 烏江を渡る危険な場面は、陸定一「老山界」、劉亜楼「渡烏江」など7篇。
- ・ 遵義占領と四度の赤水渡河については、舒同「遵義追撃」、譚政「向赤水前進」、など12篇。
- ・ 遵義会議後の大渡河強襲と瀘定橋奪取には、羅華生「強渡大渡河、瀘定橋の経過」、彭加倫「飛奪瀘定橋」など34篇
- ・ 雪山越えと草原縦断は、何滌宙「絶食的一天」など9篇。
- ・ 紅軍北上と甘南一帯への進出は、楊成武「突破天險臘子口」など6篇。
- ・ 長征途中の医療救護、後衛防御、女性英雄などは、徐特立「長征中的医院」、董必武「長征中的女英雄」など6篇。
- ・ その他に、長征を謳歌する詩詞や歌曲に、陸定一・賈拓夫の「長征歌」、陸定一・黄鎮「兩大主力会合歌」など10篇。

このように配置された作品群が「二万五千里」の艱難辛苦の行軍を再現するようになっている。この時系列の配置と、作品に付けられたロマン主義的な表題は、長征の物語群の生成の心情的背景をうかがわせる<sup>(17)</sup>。

後に出版された1942年版の編集者は、この1937年版について次のように強調している。「ここで特に指摘しておくべきことは、執筆者の大部分はこれまで作文などしたことのない者で、銃弾の飛び交う中で字を覚えた人々であるということである。彼らの文章技術は絶対に水準以下である。しかし彼らは粗削りで素朴だが彼らの偉大な生活、偉大な現実と世界の謎という神話を書くことができた。この粗削りな素朴さは愛すべきであり、当然ながら貴重である<sup>(18)</sup>」。「粗削りで素朴だが」「愛すべきだ」と編集者が評する回想の作品は、輪郭のない「物語」、冷

却され客体化される以前の、不定形な叙景と叙情の混交する可塑的な状態にある。

『二万五千里』は延安でよく読まれた。戦闘員の勇敢さ忠誠心が読むものを感動させたようである。延安や各地の抗日根拠地で人びとは争って読み、なかなか手放さなかったため、編者は新聞で照会しなければならなくなった。「『二万五千里』の最初の原稿をだれが持っていったかわかりません。現在至急全部を装丁しなければなりませんので、どうかお返してください。この原稿を知っているか見たことのある方が教えてくだされば、感謝にたえません<sup>(19)</sup>」。

この1937年版『二万五千里』は20数部が手書きされて、参考のため配布されたにすぎない。正式に印刷され出版されるのは5年半以上が経過した1942年11月のことである。

1936年12月12日、中国現代史の画期となる西安事変が勃発した。中共に共鳴した東北軍が蒋介石を拘束し内戦停止と一致抗日を要求した。結果として国民党と共産党の両党の協力関係が成立するが、1937年版が完成した当時は両党首脳協議の最中であり、国民党を敵視し、国民党との「戦闘」を主題とする回想録の公開は状況から見て延期されたのではないかと推測する<sup>(20)</sup>。

## (2) 長征回想録の再生産

1937年の『二万五千里』以後、これにならった集団制作が相次いだ。1930年代後半は、長征に関する回想録が「生産」され続けている。たとえば、艾克思の『延安文芸史』は以下のものを数えている<sup>(21)</sup>。

- ①『紅軍故事』。1936年11月3日、紅軍総政治部宣伝部が原稿募集を告示。目的は「紅軍部隊に課外の教育材料を与え、紅軍の戦闘の史跡を宣伝すること」とし、「『長征記』の踊るような精神で執筆に参加する」よう求めた。まもなく『新中華報』に陸続と応募作品が掲載された。
- ②『蘇区の一日』。1937年11月21日に中国文芸協会が発動した作文活動。丁玲が指導する中国文芸協会が茅盾の『中国の一日』をまねて、2月1日の見聞や書簡を内容とする作文の募集を行った。
- ③『徵集紅軍歴史資料的通知』。1937年5月10日、中央軍委毛沢東主席、朱徳総司令が発出し、鄧小平、陸定一、丁玲、舒同、張愛萍、傅鐘、甘泗淇、黄鎮、蕭克、呉奚如ら11人が編集委員となった。募集の内容は「長征の一部あるいは全部の回想」「犠牲となった同志の伝記あるいは紅軍の物語」「各戦役と重要な戦闘」などで、劇、即興劇、歌曲、日記、戦史、史略の形式とされた。
- ④『五月在延安』（後に『五月的延安』）。1938年4月、陝甘寧辺区文協が原稿を募集。辺区の5月の事件、見聞を内容とする。編集委員会の艾克思、柯仲平、柳青、徐懋庸、張季純、林山、高敏夫の努力で、350篇の原稿を得て、55篇を選出した。1939年5月に読書生活出版社から出版。
- ⑤『我怎樣到陝北来』。多くの「熱血青年愛国人士」が封鎖線を突破し延安に駆け込んだ記

録。辺区文芸協会編輯小組の脚色を経て出版。

- ⑥『十年牢獄生活』(また『三千六百日』)。国共合作崩壊後に国民党に投獄されて十年間の鉄格子生活をした同志の闘争の記録。

以上のとおり、当時は、長征参加者をも含めた中共内部、紅軍、八路軍内部でも長征の「偉業」に対する興味と関心が高かったことをしめしている。⑤の『我怎樣到陝北來(私はどのようにして陝北へ来たか)』は中共の宣伝や業績に共感し沿海都市部から陝北・延安へ向かう青年たちが相当数いたことを反映している。いずれも中国全土に流布し、中共の存在を広く知らしめることになった。

## 2. 1930年代における長征物語の形成

### (1) スノー『中国の赤い星』とその影響

具体的な著者名を持つ「作文」を収録した一群の長征回想録と平行して、当事者以外の著者が執筆する長征に関する「物語」からなる長征の記録がある。これを長征物語の類型と分類する。

【表2】概念としての「回想」と「物語」

	話し手	視点	距離	記述
回想	話し手が登場する	当事者の視点	直接的経験	主観的、即自的記述
物語	話し手は登場しない	第三者の視点	間接的伝聞	客観的、対自的記述

このような「物語」の成立にあたり第三者の眼が触媒となっていた。その早期の著作として、エドガー・スノー(汪衡訳)「二万五千里長征」(1937年11月)、および幽谷の「紅軍二万五千里西引記」(1937年7月)がある。

エドガー・スノーは1936年8月から10月まで陝北において中共の実態を直接取材し、その記録は『Red Star over China(邦訳:中国の赤い星)』と題され、1937年10月に英国で、1938年1月に米国で出版された。スノーが取材した当時、紅軍の陝北入りから9ヶ月が経ち、党中央は瓦窯堡から保安に移動した直後で、多くの長征参加者が毛沢東と楊尚昆の求めに応じて回想録を書いたばかりであった。スノーは取材を終えて延安を離れるとき、日記とノート十数冊、30本のフィルム、数ポンド分の紅軍の雑誌、新聞、書類を持ち帰った。1937年版の回想録『二万五千里』の原稿の一部もそれに含まれていると考えられる<sup>(22)</sup>。スノーは長征兵士の回想録について次のとおり記述している。

「この多彩な、エピソードに富んだ遠征についてここではきわめて簡略にその概観を記すことが出来るにすぎない。共産党は長征に参加した数十人の寄稿を集めて、その記録を認めており、既に約30万語に達したと聞かされた。冒険、踏査、発見、人間の勇気と臆病、歓喜と勝利、苦悩、犠牲、忠誠心、そしてそれらすべてを貫いて、これら、人間によるものであれ、自然によるものであれ、また神によるものであれ、敗北を認めない数千の青年たちの焔のような、くもる

ことのない熱意と不滅の希望、そして驚くべき革命的樂觀主義——これらすべてが、そしてさらにそれ以上が、近代史上他に類のない大史詩の歴史に包含されているかのようなのである<sup>(23)</sup>」。

『中国の赤い星』の第5部は「長征」の記録に充てられ、特に大渡河越えと瀘定橋奪取の逸話は生彩に満ちた描写となっており、『二万五千里』の原稿が使われたと思われる。外国人ジャーナリストのルポルタージュであることが、その客観性の保証となっている。

最も早い中国語版は汪衡訳により、上海の『文摘戦時旬刊』第5～9期（1937年11月～1938年1月）に「二万五千里長征」の題で連載された。スノーは1937年11月に上海で胡愈之に会い、英語版の『中国の赤い星』を贈呈した。『東方雑誌』編集者で中共の秘密黨員である胡愈之が、林淡秋、胡仲持、許達、傅東華らと連絡し翻訳を行い、1938年2月に「復社」名義で中国語版を出版した。日本の軍部と国民党の検閲を避けるべく「紅」の字は用いず、書名は紀行文のように見える『西行漫記』とした<sup>(24)</sup>。

## （2）幽谷「紅軍二万五千里西引記」の成立

スノーの著作の中国語版が出る前に、国民党統治区で紅軍長征のエピソードが広まっていた。1937年7月、上海の掌故雑誌『逸経』半月刊の第33、34期に「幽谷」署名で連載された「紅軍二万五千里西引記」は、紅軍第一方面軍の長征の過程を紹介している。それと同時に、夏丐尊と葉聖陶が主編、開明書店発行の大型総合雑誌『月報』の第1巻第7期（1937年7月15日）に、幽谷「紅軍二万五千里西引記」の全文が掲載された。ただし当局の監視を避け題名の「紅軍」は省いた<sup>(25)</sup>。

執筆者の「幽谷」は周幽谷といい、中共の地下黨員董健吾で、表向きの身分は上海聖教会牧師である。スノーが秘密裏に陝北辺区に取材に行くときに同行した「王牧師」は董健吾のことである。董は延安での取材、紅軍関係者（博古、林伯渠ら）との接触を通してスノーと同じく『二万五千里』原稿の一部を読んでいる。そして1937年初め、上海へ派遣された潘漢年が董の要望に応え「重要な資料」（おそらくは1937年版『二万五千里』）をひとつづてに董賢吾に届けて来た。董健吾はこれらの原稿を改編して「紅軍二万五千里西引記」を執筆し、『逸経』雑誌社長の簡又文に掲載してもらった。上海では人々の関心の的となっていた紅軍長征の成功と全行程が明らかになったことから、「西引記」は大きな話題になった<sup>(26)</sup>。

「西引記」は『二万五千里』の縮約版の趣がある。生彩ある逸話のいくつかは明かに『二万五千里』に依拠している。例えば、紅軍が茅台酒の蔵元「義成老焼坊」を見つけ酒を痛飲する場面は熊伯濤「茅台酒」の引用。また紅軍が草原越えで食糧をなくした場面は、舒同「蘆華運糧」によっている。付録の「紅軍第一軍団西引中経過地点及里程一覧表」も原書とまったく同じである<sup>(27)</sup>。

幽谷は、蔣介石を「蔣委員長」と呼び、長征については国民党側の蔑称である「西竄」を用いるなど、共産黨員以外の第三者が執筆した体裁を取っている。スノーの作品と同じく、直接体験の「作文」を資料とし、それを客体化することで「物語」化している。



スノー、幽谷の著作のほかに、モスクワの陳雲が紅軍捕虜となった国民党軍医師「廉臣」の名義で1936年3月にパリで発表した「隨軍西行見聞録」や、『大公報』記者范長江の中共ルポ『中国的西北角』（1937年1月）、紅軍捕虜となった国民党軍兵士楊定華のパリの雑誌に掲載された2篇の回想録もまた、外部の者の眼による長征の総括であった<sup>(28)</sup>。

### (3) 物語化の進展

外国人ジャーナリスト、国民党支配区の新新聞記者、国民党軍医らの外在的な「視点」が「回想」を「物語」へ昇華させる枠組を与えていた。客観的に整理された紅軍の長征に関する情報が、まずは上海から、そして全国へと伝播してゆく。スノーや幽谷に触発され、そしてそれらに依拠して紅軍長征の「物語」を書くことが相継ぐようになされた。

そのひとつが、趙文華編著『二万五千里長征記』（上海大衆出版社、1937年12月）である。大衆叢書の一冊で全83頁。表紙に紅軍行軍の木版画、扉に4枚の写真、「総指揮朱徳將軍」「抗日軍政大学師生之一部」「八路軍的中堅人物」（周恩来、徐向前、肖克）「毛沢東氏向軍民演講」があり、全体は、6章44節からなる。その詳細は【表3】のとおりである。

【表3】 趙文華編著『二万五千里長征記』の構成

章	節	節数
第1章「紅軍大会合」	「国共分裂以後」「第一師的建立」「朱德的到来」「六次大会」	4節
第2章「艱苦而壮大的道路」	「在贛南打開血路」「朱毛在瑞金」「立三路線与紅軍」	3節
第3章「围剿之突破与长征之準備」	「第一次围剿：大軍十万」「第二次围剿：大軍二十万」「第三次围剿：大軍三十万」「第四次围剿：最危險的一次」「第五次围剿：大軍百万」「長征的準備」「勝利地到達了陝北」「围剿的無効」「紅軍一名、代価8万元」	9節
第4章「二万五千里長征紀程」	「23年の夏」「突圍西進」「進逼湘粵邊境」「偷渡烏江」「坦然西移」「茅台逸事」「渡金沙江」「過大渡河」「進入倮倮国」「17勇士大渡河」「西進中 fastest 的一天」「到卓克基」「到毛兒蓋」「陝北大会合」	14節
第5章「搶橋」	「跑路而且打仗」「要奪取盧定橋」「口号声打上心頭」「大家都變成泥菩薩」「打起幾十個火把」「大渡河之浪」「只要你的橋、不要你的槍！」「20個巨人一個也沒有少」	8節
第6章「長征閑話」	「女戰士30人」「廣昌大会戰之後」「偷渡金沙江」「十万人生命有関的一座橋」「最後的出險」「当紅軍被围剿的時候」	6節
「特載」	「紅軍第一軍団西引中經過地点及里程表」	

紅一方面軍の長征の全行程を鳥瞰しながら、第4～6章の幾節かは、1937年2月の回想録『二万五千里』に依拠していることが見て取れる。

この時期、趙文華の他に、大華編著『二万五千里長征記——從江西到陝北』（上海復興出版社、1938年1月）、黄峰編『八路軍行軍記——長征時代』（上海光明出版社、1938年1月）、朱笠

夫編著『第八路軍紅軍時代的史実——二万五千里長征記』（漢口抗敵出版社、1938年1月）が相次いで出版されている<sup>(29)</sup>。

抗戦初期、内戦停止と一致抗日に共鳴した多くの青年が延安に行く。多くは、スノー、幽谷、范長江などが伝える紅軍長征の英雄的物語に引き寄せられた結果である。新来者を迎えた延安では、長征に参加した者が憧憬の対象となり、長征の英雄的事例も幹部訓練の思想的教材とされ始め、長征に関する記述はしだいに増えていった<sup>(30)</sup>。

長征物語は、長征の回想録に共通の枠組を与え、あくまでも個人的な「体験」であるものを客体化し、「物語」として固定した。書き手が主人公であった「回想」とは異なり、書き手は「物語」の背景に退き、不可視な存在になっている。「物語化」することで典型化、類型化も進められた。やがてそれは過去の記憶の編集にもつながってゆく。

### 3. 紅軍長征記の普及

#### (1) 1942年延安版の登場

1937年の長征回想録『二万五千里』は、その後編集者が延安を離れたこともあり、印刷されることはなかった。ただ1冊が八路軍総政治部宣伝部に保管されており、借り出す者が多く、総政治部宣伝部では損壊や紛失を恐れ、1942年11月20日付で印刷発行した。書名は『紅軍長征記』と改めた。党内参考資料とし「本書を手にした同志はしっかりと保存し、他人に貸し出してはならず、複写版を出してもならない」とされた。紙が粗雑で閲読にも保存にも適さず、その後党中央の移動や戦闘のため建国後まで残ったものは極少数だったという。2002年に『紅軍長征記』がハーバード大学燕京図書館で見つかった。朱徳の署名入りで、エドガー・スノーが贈呈を受けたものとされる。この1942年版の回想録は中国国内ではすでに見つけ難くなっていた。燕京図書館でこの1942版が発見されて以来、にわかに長征回想録の研究が進み、その成立過程がある程度明かになっている<sup>(31)</sup>。

この時期に公刊された背景には整風運動の展開があった。1942年2月「党の作風を整頓しよう」という毛沢東の演説に始まり、延安で急増した新旧雑多な党員の政治思想の点検が行われた<sup>(32)</sup>。老幹部の「経験主義」、知識人の「教条主義」などが批判され自己批判が求められた。この運動の中で、毛沢東は、「党の歴史を、党の歩いて来た道を知らなければ、うまく仕事をこなすことができない<sup>(33)</sup>」と党の歴史を学習するよう党員たちに説き、以来、緊張をはらんだ大規模な学習運動が繰り返された。そのための学習教材として使用されたと考える。

#### (2) 1947年抜粋版

1947年10月、冀南書店が1942年延安版『紅軍長征記』の抜粋版を出版した。書名は1937年版と同じ『二万五千里』とした。表紙に鎌とハンマーの図案を付し、書名の下に副題「長征英雄集体執筆」と記してある。この抜粋版には、董必武「出発前」、李富春「夜行軍」、陸定一「老山界」、李一氓「从金沙江到大渡河」など、原書より72篇少ない38篇が収録されている。別に

紅軍歌曲7曲の譜面を入れ、毛沢東が長征中に書いた詩「七律・長征」と詞「清平樂・六盤山」が挿入され、「編輯者的話」と「紅軍長征記要（附長征図）」が加えられている。<sup>(34)</sup>

冀南書店編集部の「編輯者的話」は、「現在わが軍は勝利の出撃におり、全力で大反攻を準備している」、「本書は部隊の話を中心に材料にしており学校の補充教材、幹部の読物とすることができる。われわれが勝利の前進を行なうさい、困難を克服する力と信念を高めてくれるであろう<sup>(35)</sup>」と出版目的を明示している。

この時期に出版された長征回想録には類書が多く、たとえば同じく冀南書店から1947年8月に陸定一等著『長征的回憶』が出版されている。内容は、「老山界（定一著）」、「五一前夜（莫文驊著）」、「我們怎樣過的雪山和草地（潘自力著）」、「草地（蔡前著）」、「紅軍的炊事員老路（袁血辛著）」など『紅軍長征記（二万五千里）』とそれ以外に書かれた回想録が収録されている<sup>(36)</sup>。

### (3) 1940年代の物語化

長征終了後10年目、抗日戦に勝利し、国民党との内戦に突入した時点での物語群のあり方を確認しておきたい。

たとえば「長征の物語」という意味の書名をもつ『長征的故事』が、1946年7月に北極星出版社から出版された。全体を7章に分け、本稿冒頭で示した物語類型でいえば、(c)「突破烏江」、(g)「巧渡金沙江」、(h)「彝海結盟」、(i)「強渡大渡河」、(j)「飛奪瀘定橋」、(k)「越雪山」+ (l)「過草地」、(m)「突破天險臘子口」から構成されている（【表4】を参照）<sup>(37)</sup>。

【表4】1940年代の長征物語文献一覧

書名	『長征的故事』	『長征的故事』	『長征故事』	『長征故事』	『長征故事』
出版社	韜奮書店編印	北極星出版社編印	東北民主聯軍総政治部編、自衛出版社	晋冀魯豫軍区政治部編印	華東膠東軍区政治部宣伝部編印
出版年	1945年10月	1946年7月	1946年	1947年8月	1948年
内容	衝過烏江天險巧計 奪取金沙江 經過猓猓区 大渡河是我們的生命線 爬雪山過草地 突破天險臘子口	一、烏江十八英雄 二、巧計渡過金沙江 三、通過了猓猓区 四、大渡河上的英雄 五、搶瀘定橋 六、爬雪山過草地 七、突破天險臘子口	衝破烏江天險巧計 奪取金沙江 經過猓猓区 大渡河是我們的生命線 爬雪山過草地 突破天險臘子口	一、衝破烏江天險 二、紅軍与保保兄弟結盟 三、十八英雄強渡大渡河 四、「不要爛槍只要橋」 五、爬雪山 六、過草地 七、突破臘子口	衝破烏江天險巧計 奪取金沙江 經過猓猓区 大渡河是我們的生命線 我們要橋不要槍 爬雪山過草地 突破天險臘子口 紅一団強渡大渡河 一個掉隊的小鬼過雪山
備考	1冊20頁、32開	1冊39頁、64開	1冊22頁、32開。 戰士叢書の一	1冊28頁、64開。 四の「不要爛槍只要橋」は「瀘定橋奪取」の物語。	1冊68頁、64開。 戰士讀物之一

そしてこれが10周年記念を迎えた1946年という時点で、「長征」の「歴史」をふり返り記述する方法でもあった。この『長征故事』に対する需要は多く、類書が相継いで刊行されている。

長期にわたり党史史料を収集、整理して来た中国国家図書館は、1940年代半ば以後において多彩な『長征故事』（表題にはいくらか幅がある。『二万五千里』はその変型体のひとつである）の刊本があることを確認している（【表4】を参照）。そしてそこには、たとえば、趙文華編著『二万五千里長征記』が示した物語化によって特徴付けられる、1930年代後半に簇生する長征物語群の「遺伝子」を継承した次の世代の長征記録の姿を見ることができる。

興味深いことに、物語類型と回想類型の融合類型も出版されている。ここには物語と回想の相補的な関係が示されている（【表5】を参照）。

【表5】1940年代の長征物語（融合型）文献一覧

書名	『紅軍長征故事』	『紅軍長征故事』	『紅軍長征故事』
出版社	華東新華書店編印	鄭州、中原新華書店	山東新華書店-総店編印
出版年	1947年9月初版 1949年4月第4版	1947年9月	1947年9月
内容	【第一部分、紀実描写】 一、突破烏江天險 二、巧奪金沙江 三、通過猓猓区 四、搶渡大渡河 五、飛奪瀘定橋 六、翻過大雪山 七、草地行軍 八、天險臘子口。	【紀実篇】 突破烏江天險 巧奪金沙江 通過了猓猓区 搶渡大渡河 飛奪瀘定橋 翻過大雪山 草地行軍 天險臘子口	【第一部分、紀実描写】 一、突破烏江天險 二、巧奪金沙江 三、通過猓猓区 四、搶渡大渡河 五、飛奪瀘定橋 六、翻過大雪山 七、草地行軍 八、天險臘子口
	【第二部分、長征片段回憶】 定一所作《老山界》 張政權作《長征中的幾件事》 羅良儀作《雪花山上》 蔡前所作《草地》 林間所作《一個掉隊的小鬼》 袁血卒的《紅軍的炊事員—老路》 附《紅軍長征路線図》	【回想篇】 老山界（定一） 渡金沙江（李立） 重逢（劉振江） 懷義灣（高朗亭） 雷老婆（高朗亭）	【第二部分、長征片段回憶】 老山界 長征中的幾件事 草地 一個掉隊的小鬼 紅軍的炊事員—老路
備考	1冊84頁、32開。大衆文庫。通俗讀物、1年半で重版。	1冊104頁、32開	1冊62頁、32開。大衆文庫。通俗教育讀物として広く流通

日中戦争終了後、国共内戦が本格化する。上記『長征的故事』が出版された1946年7月には、国民党軍50万が中共の江蘇・安徽の根拠地への攻撃を開始し、内戦が全土に拡大することになった<sup>(38)</sup>。敵の攻撃と多数の死傷者、味方を守るための自己犠牲、厳しい自然環境がもたらす

飢餓と寒さと相互扶助、将兵の厳格な規律と英雄的な奮闘を主題とする長征物語が全国に流布することは、中共による政権奪取の正統性を傍証する結果をもたらしたであろう。「物語」は構造化された信条体系であり、時空間を越えて再生可能である。長征の「物語」群は、延安の整風運動の中で、敵と味方、正しい路線と誤った路線を区別し、中共黨員であることに意味を与え、党への忠誠心を強化するものとして参照されつづけたと考える。

## むすびにかえて

### (1) 1950年代の長征回想録

1949年の中華人民共和国建国後、中共は遵義會議紀念館、瑞金革命紀念館、「中国工農紅軍勝利完成二万五千里長征二十周年」紀念切手、そして、紀念碑、烈士陵園、演劇、映画、歌曲など、さまざまな媒体を通じて紅軍長征の保存と宣伝を始めた。

党中央宣伝部は党史資料を専門に収集する部門、党史資料室を置いた。宣伝部副部長の徐特立が主任を兼務し、黎樹が副主任となった。やがて党史専門家の繆楚黄が加わり『党史資料』の編集刊行の責任者となり、年4回800部を発行した<sup>(39)</sup>。

1954年、党史資料室は『党史資料』誌上に3期に分けて、1942年版の『紅軍長征記』を掲載した。題名は「中国工農紅軍第一方面軍長征記」と改め、再度校訂が行なわれ、繆楚黄が補注と附注を行った。100篇の回想録から4篇を削除して96篇を収録、原版の付録から3つの表を加えた<sup>(40)</sup>。

次いで、1955年、人民出版社が長征勝利20周年（紅軍の陝北到達20周年）を記念し、1942年版を再刊した。原版から52篇を選出し、書名は『中国工農紅軍第一方面軍長征記』と改めた。これに廉臣「隨軍西行見聞録」など3篇を追加し、付録の3表を加えた<sup>(41)</sup>。

### (2) 削除された記憶

1954年の『党史史料』版では、1942年版の100篇のうち4篇が削除された。何滌宙「遵義日記」、「絶食的一天」、李月波「我失聯絡」、莫休「一天」である。それは1955年版でも「復活」することはなかった。

何滌宙「遵義日記」は遵義に滞在した10日間の日記である。頻繁に食堂に行き食事をすると共に料理「炒辣鷄」の質が悪くなってゆくとか、革命宣伝で学校に行き学生たちとバスケットボールをしたり、ダンスパーティーで女子学生の踊りを揶揄したりと、若い紅軍兵士が遵義という「都市」で行軍中とはまったく異なった体験を享受している様子がうかがえる。同じく何滌宙「絶食的一天」は、配給された15日分の食糧である、麦焦がしと裸麦のビスケットをどう計画的に「消費」するかについて述べ、李月波「我失聯絡」は原隊からはくれた心細い思いと民衆から支援を得て帰隊するまでを書き、莫休「一天」は、遵義の街に入るさいは裸足を禁じられ新しい靴を穿くが泥道で汚れるのを嫌がる兵士や街中の状況、炊事と食事の様子、捕虜との会話など1日の出来事が述べられている<sup>(42)</sup>。

何滌宙らの回想は「革命的英雄主義」からは距離のある内容である。後に全国民が学ぶべき「長征精神」と称揚されるその内容は、(1) 革命の理論と事業に対する無比の忠誠と必ず成功すると信じる信念、(2) 困難と犠牲を畏れず、勇気をもって勝利し、楽観に満ちて勇猛邁進する英雄的気概、(3) 大局を考慮し、規律を厳守し、緊密に団結する高尚な品德、(4) 人民大衆と連携し、誠心誠意人民に奉仕して刻苦奮闘する崇高な思想、である<sup>(43)</sup>。削除された回想にはそのどれもが欠落している。

1954年をもって中華人民共和国は建国当初の暫定体制を終了した。毛沢東が国家主席に就任し、共産党の前衛論が新憲法に盛り込まれ、新民主主義論的体制から社会主義建設へと舵を切りかえた。長征の「物語」はこの時代の圧力の中で典型化されて再生産と増殖を始めていた。

1954年には高崗・饒漱石の「反党集団」に対する批判運動が、1955年には胡風「反革命集団」に対する闘争が開始された。長征の「物語」には「回想」からは発生しないもうひとつの主題が含まれている。それは遵義会議における「誤った路線」との闘争であり、張国濤西路軍の「分裂主義」に対する批判である。時代の圧力は長征の「物語」にも、新たな機能と構造を与えようとしている。

「遵義日記」は紅軍長征の「プチブルジョア」的部分であり、1950年代当時の中央宣伝部の思想と時代のバイアスから、紅軍幹部による典型的な叙述、あるいは定式化された長征の表象とは「異質」なものと思われ、削除されたと考えられる<sup>(44)</sup>。

「物語」と「回想」という異なる視点が交錯することによって「過去」の再現がなされた。「過去」の再現とは、「過去」に関する解釈の固定化をもたらし、固定化された「過去」にもとづく「現実」の再定義が行われ、再定義された「現実」が“ありうべからざる”「回想」を排除している姿がうかがえるのでないだろうか。

### (3) 1950年代の回想と2000年代の再生

1956年7月、翌1957年の建軍30周年を控え、解放軍総政治部が回想の原稿募集を呼びかけた。応募した3万篇の中から337篇を選出し、1957年8月に『星火燎原』叢書全8巻を刊行した<sup>(45)</sup>。そのうち76篇が「長征」時期の回想で、「智取遵義」(王集成)、「巧渡金沙江」(蕭応棠)、「強渡大渡河」(楊得志)、「飛奪瀘定橋」(楊成武)、「記紅軍三大主力会師」(霍薄陵、劉強)などが収録されており、1937年以來の「物語」化が定着している様子が見える。

『人民日報』社は、「『星火燎原』の多くの作品は、紅軍長征の感動的な英雄の業績を生き生きと描き、紅軍の英勇と頑強、艱苦奮闘の優秀な品質が人民の軍隊の光栄ある伝統となったことを描いており、愛国主義と革命伝統の教育の最も良い教材となった<sup>(46)</sup>」と評価する。

「回想」が現代中国における人材養成のロールモデルとなっているという指摘は興味深い点である。他方、「歴史」を構成する「物語」のあり方という観点からは、1950年代後半に執筆される「回想」群は、「定型」を通過することで過去の記憶の編集が行われている可能性があることは改めて問題視しなければならないであろう。

1957年の『星火燎原』の選から漏れ未発表となっていた685篇が、2007年に「未完稿」として出版された<sup>(47)</sup>。建国60周年となるその翌々年には、1957年版『星火燎原』と『未完稿』、そして1930年代の『紅軍長征記』の回想等をも加えた1705篇を収録した『星火燎原全集』全20巻、が出版されている<sup>(48)</sup>。紅軍（八路軍、解放軍）の「回想」に対する「人気」の高さを物語っており、それと同時に、過去の「歴史」に対する現代中国の「需要」について、あるいは階級闘争や社会主義建設が正統性の中心から逸れつつある中共の思想工作面での「必要性」およびその背景についても改めて検討すべきであろう。

### 【註】

- (1) 中共が長征の経験を今後も引照されるべき「精神」として称揚していることについては、拙稿「『長征精神』論の現代的位相」『目白大学総合科学研究』第6号、2009年3月、を参照。
- (2) 野家啓一『物語の哲学』（岩波現代文庫、2005年）114頁。「体験」と「経験」と「歴史叙述」の関係に関する考察が参考になる。また、「出来事の資料」（単純な物語）と「歴史的記述」（有意味な物語）の関係については、アーサー・C・ダント、河本英夫訳『物語としての歴史——歴史の分析哲学』（国文社、1989年）を参照。物語構造の分析法については、ジャン＝ミシェル・アダン、末松壽・佐藤正年訳『物語論——プロップからエーコまで』（白水社、2004年）を参照。
- (3) 《紅色精神》編写組編『紅色精神 小学版』湖南教育出版社、2011年。
- (4) 曲愛国・張從田『長征記』中国旅遊出版社、2007年。
- (5) 中共中央党史研究室第一研究部編『紅軍長征史』遼寧人民出版社、1996年（再刊、中共党史出版社、2006年）。
- (6) 高華「紅軍長征の歴史叙述是怎样形成的」『炎黄春秋』2006年第10期、28頁。
- (7) 李海文主編『中国工農紅軍親歴記』四川人民出版社、2005年、379頁。
- (8) 中共中央文献研究室、新華通訊社編『毛沢東新聞工作文選』新華出版社、1983年、37頁。艾克思主編『延安文芸史』上巻、石家莊、河北教育出版社、2009年、62頁。孫国林「毛沢東倡議写成的《紅軍長征記》」『党史博採』2006年10月、12頁。高華、前掲、28頁。尚、書簡による「徵稿啓示」は次のとおりである。「目下国際的な宣伝を行い、国内外で大規模な募金運動を行なうために、『長征記』を出版する必要がある。そこで特に集団創作を呼びかける。各人は自分が経験した戦闘、行軍、地方、部隊の任務について、生き生きとして面白いところを選び断片を作文してもらいたい。文章は意味が通ればよい。凝ったものは求めない。文章を書くことは、紅軍が募金の宣伝を行い、国際社会への影響を広げるためである。応募は9月5日までに総政治部に郵送してほしい。薄謝を用意し謝意を表したい」（高華、前掲、28頁。孫国林、前掲、12頁）。
- (9) 李海文、前掲、379頁。
- (10) 艾克思主編『延安文芸史』上巻、石家莊、河北教育出版社、2009年、62～63頁。
- (11) 艾克思、同上、58～59頁。
- (12) 高華、前掲、28頁。
- (13) 「關於編輯的經過」『紅軍長征記』上、広西師範大学出版社、2006年（1942年版の再刊である）、2頁。李海文、前掲、380頁。
- (14) 「文芸在蘇区」延安『解放』週刊、第1巻第23期（艾克思、前掲書、62～63頁）。
- (15) 啓峰「現存最早の長征記録《二万五千里》」『神州』2006年第10期、59頁。孫国林、前掲、12頁。
- (16) 沈津「《紅軍長征記》：記録中国工農紅軍長征的史実（代序）」『紅軍長征記』上、広西師範大学出版社、2006年（ハーバード大学所蔵版の影印である）。高華、前掲、28頁。李海文、前掲、380頁。
- (17) 艾克思、前掲、63～64頁。
- (18) 「關於編輯的經過」（1937年2月22日）『紅軍長征記』総政治部宣伝部印、1942年11月、3頁（『紅

- 軍長征記』上、前掲、2006年)。啓峰、前掲、60頁。
- (19) 「徐夢秋啓事」『新中華報』1937年6月13日(艾克思、前掲、68頁)。
- (20) 辛平「長征勇士写成的第一本長征故事」『党的文献』1996年第5期、31頁。
- (21) 艾克思、前掲、69頁。
- (22) スノーは紅軍幹部左権のところで紅一軍団が編集した「長征中經過地点及里程一覽表」(『二万五千里』の付録)を見ている(劉明鋼「《紅軍長征記》:一份關於長征的最早記錄」『党史博覽』2006年第10期、40頁)。
- (23) スノー、松岡洋子訳『中国の赤い星』筑摩書房、1975年、133頁。
- (24) 胡孝文「他們、向世界傳播長征“火種”」『世界知識』2006年第24期、55頁
- (25) 張其武「記錄紅軍長征全過程的早期專著」『粵海風』2006年5月、75頁。高華、前掲、28頁。幽谷については、董賢吾の息子の回想録、董雲飛「『幽谷』原是董賢吾—《二万五千里西行記》的由来」(『上海党史与党建』1994年第4期)を参照。また幽谷「紅軍二万五千里西引記」は、陳宇編著『誰最早口述長征』(解放軍出版社、2006年)、および劉統整理注釈『親歷長征—来自紅軍長征者的原始記錄』(中央文献出版社、2006年)に収録されている。
- (26) 啓峰、前掲、60頁。張其武、前掲、75頁。董雲飛、前掲、45頁。
- (27) 啓峰、前掲、59頁。舒同「蘆華運糧」などについては『紅軍長征記』1942年版(『紅軍長征記』広西師範大学出版社、2006年)下冊、所収を参照。
- (28) 廉臣「隨軍西行見聞録」については、羅慶宏「陳雲:対長征進行宣伝和総結」(『世紀橋』2007年第3期)、羅慶宏「陳雲与長征」(『商丘職業技術学院学報』2007年第1期)、蔣建農「紅軍長征的最早記錄——重讀『隨軍西行見聞録』札記」(『党史縱横』1995年第12期)、陳宇「第一個向世界報道長征的人」(『報刊薈萃』2006年第3期)を参照。また、范長江『中国的西北角』については、馬永強「范長江:報道紅軍長征第一人」(『史海鈞沈』2002年第1期)、李元鴻「范長江——報道長征第一人」(『内江師範学院学報』2006年第21卷第3期)を参照。『中国的西北角』は松枝茂夫の邦訳がある(筑摩書房、1983年)。楊定華とその回想録「雪山草地行軍記」「由甘肅到山西」については、姚群民「楊定華長征回憶有関問題的述論」(『歴史学研究』2006年第10期)、藍鴻文「巴黎《救国時報》与紅軍長征」(『國際新聞界』2004年第5期)を参照。
- (29) 張其武、前掲、75頁。
- (30) 高華、前掲、30頁。
- (31) 「出版的話」1942年版『紅軍長征記』の前文(『紅軍長征記』広西師範大学出版社、2006年、上冊所収)。李海文380頁。張其武75頁。張鷹によれば、中国革命歴史博物館に所蔵されている(張鷹「文学中的『長征』」『軍营文化天地』2006年10月)。また繆平均によれば陝西省档案馆にも所蔵されていることが報告されている(繆平均「一部我党我軍歷史上有重要研究價值的著作—館藏珍貴史料《紅軍長征記》」『陝西档案』2006年第5期)。現在、1942年延安版の『紅軍長征記』が長征終了70周年となる2006年に広西師範大学出版社よりリプリント版が出版されており、利用可能となっている。
- (32) 整風運動については、さしあたり高華『紅太陽是怎样升起的一延安整風運動的来龍去脈一』(香港、中文大学出版社、2000年)を参照。
- (33) 中共中央文献研究室編『毛沢東思想年譜 1921-1975』中央文件出版社、2011年、316頁。
- (34) 孫国林、前掲、15頁。孫国林は1947年11月の出版としているが、中国国家図書館所蔵版として知られている同書は、1947年10月の出版となっている。ここは後者に従った。
- (35) 孫国林、前掲、15頁。孫国林は「編集者的話」とするが、中国国家図書館所蔵版に従い「編輯者的話」とした。
- (36) 陸定一等著『長征的回憶』(冀中新華書店、1947年9月)もあるが、まったく同じ内容である。冀南書店の『回憶』は陸定一が筆頭著者となっているが、陸の回想が冒頭に置かれていることに由来するにすぎず、陸の編著になるものではない。
- (37) 『長征的故事』(出版地未詳)北極星出版社、1946年7月。縦横12.5cm×10cm(64開)の小さな書物である。



- (38) 安藤正士『現代中国年表 1941-2008』岩波書店、2010年、63頁。
- (39) 李海文、前掲、381頁。高華、前掲、30頁。
- (40) 李海文、前掲、381頁。啓峰、前掲、60頁。
- (41) 李海文、前掲、381頁。劉統、前掲、3頁。啓峰、前掲、60頁。艾克思、前掲、69頁。
- (42) いずれも劉統、前掲書に再録されている
- (43) 李小三主編『中国共産党人精神研究』中央文件出版社、2008年3月、210～212頁。
- (44) 高華、前掲、30頁。閻益佳責任編集「曾被削去的長征片断《遵義日記》」『神州』2006年第10期。
- (45) 人民日報理論部主編『精神的力量 中国共産党偉大精神最新闡釈』人民日報出版社、2011年、49～50頁。
- (46) 同上、50頁。
- (47) 徐向前等『星火燎原・未刊稿』全10集、解放軍出版社、2007年8月。
- (48) 朱德等『星火燎原全集』全20卷、解放軍出版社、2009年9月。

(平成23年11月9日受理)